

ルベルト・エリアスが述べたように「自己規制」を高めることで、礼節およびマナーは道徳性をも可能にするのである。だが、やはりそれらが強いるルールが反道徳的であつてはならない。『人倫の形而上学』が構築を試みたのはこの点である。カントは同書で礼節「といふ嘘」と眞実性の正負を天秤にかけ、また道徳的「徳」と礼節の「優美」の相互補完性の論証に専心したのである。

よく知られているように、カントにとって眞実性とは、その遵守が他者におよぼす一切の影響を斟酌しない絶対的かつ無条件の義務である。⁽⁵⁾よつて自身の気持ちを「まかす」「善きマナー」や「礼節」をそれ自体として偽りとみなすべきならば、こうした「まかしが我われの道徳的義務といふにすれば折り合うのか理解にくるしむ。だが問題は、厳密な意味での倫理ではなく、むしろマナーや礼節を社会生活において適用する際に生じる「決疑論的問題」〔カトワリックの用語：教義を現実社会の用いていかに適用すべきかを問う〕なのである。礼節がその定義からして我われが思うことと振る舞いによつて表現するものとを違わせるとして、礼節は嘘そのものではない。形式主義的な單なる礼節であつても、眞に誰かをだます「いはやめないだらうからだ」「たんなる礼節に基づく眞実

(5) *Critique de la faculté de juger, op. cit.*, § 83 「判断力批判」下、1111頁一〇一。

(6) « L'idée d'une histoire universelle », 7^e proposition, in *Opuscules...*, *op. cit.*, p. 82 「世界市民という視点から見た普遍史の理念」、五四一～二。

(7) よりわけ下記を参照。*Doctrine de la vertu*, I, 1^e partie, 2^e section, § 9 (*Œuvres philosophiques, op. cit.*, t. III, 1986, p. 715-719) 〔「人倫の形而上学 第一部 德論の形而上学的原理」〕I - 第一部第二篇第九節「虚言について」宮村悠介訳、岩波文庫、11011四、111四、111〇四～五〕。ベンジャマン・コスタンの批判への応答である以下も参照。『Sur un précédent droit de mentir humanité』(*ibid.*, p. 433-441)〔「人間愛から嘘をつく権利と称されるものについて」〕谷田信一訳、『カム全集』十一、111四、111四～111五〇四～五〕。